

光といのち

第103号
一報恩講一
2016年11月10日発行

発行所
真宗大谷派勝善寺
〒299-2214
千葉県南房総市二部1344
電話 0470-57-2657
FAX 0470-57-2290
Eメールino-teyy@khaki.plala.or.jp
住職 井上孝昌

報恩講

速夜法要

十一月十八日(金)
十五時〜十六時

晨朝法要

十一月十九日(土)
六時半〜七時

日中法要

十一月十九日(土)

受付 九時三十分〜

十時二十分〜十二時三十分

感話 田村晋一氏

法要 正信偈念仏和讃

法話 了善寺住職百々海真師

講題 「聞法即救済」

※法要法話後にお齋(食事)

聖道門のひとほみな

自力の心をむねとして

他力不思議にいりぬれば

義なきを義とすと信知せり

正像末和讃



世話人総会 総勢39人で、まずご本尊に向かいお勤めしました。

三十四地区の世話人で、十月二十三日(日)に総会を開き、各担当のご門徒への参詣催促や仏具磨き・前日準備・当日の運営と片づけの役割分担などについて会議しました。

親鸞聖人のお心に触れる場である報恩講を、皆さんと共に過ごすためです。どうぞ日中法要だけでなく、速夜法要・晨朝法要もお参りください。

題字下の和讃は、親鸞聖人が晩年にお詠みになった『正像末和讃』の一つです。当寺では、日中法要でお勤めする六首の和讃のうち二首目です。

「聖道門」とは、修行や学問を積み一切の惑いを断ち悟る自力の仏道のことです。それに対して私たちの歩む仏道は、浄土門と言います。念仏申し阿弥陀如来に救われる他力の仏道です。自力を修行の根本にしている聖道門の人も、他力(如来のはたらき)を生きていることに気づき、自力(人間のはからい)ではなくそれを超えた他力に救われていたと知り、他力が信じられるという意味です。私たちは自力を尽くす聖道門

的な性があります。しかしそこに苦悩の原因があったとうなずけた時、他力の仏道を慶べるのでしよう。



聖人橋(せいじんばし)の標柱

昨年(2015年)の報恩講で「せいじん川」に架かる橋の名が決まり、右側に「聖人橋」左側に「せいじんばし」と記しました。

川名舞乃さん(検儀谷)が文字を書き、三堀清さん(二部)が彫り、朝倉正之さん(二部)が色を入れて下さいました。有り難うございました。

※仏谷(ほとけがやつ)を流れる川は、「せいじん川」と呼ばれています。

能重國雄さん(鋸南)靴だな奇進

報恩講などの法要時に参詣者の履き物が、

靴脱ぎ石だけでは収まりませんでした。

これで整頓できます。

有り難うございました。



『御伝鈔』は、親鸞聖人の生涯を讃える絵詞『親鸞伝絵』の詞書の部分を巻物にした上巻八段下巻七段からなる物語です。作者は聖人の曾孫、覚如上人です。今回の上巻第七段目は、「信心一異諍論」と呼ばれています。

『御伝鈔』第七段 意識

あるとき、親鸞さまは、次のようにお話しくださいました。法然さまのところに、聖信房、勢観房、念仏房などの大ぜいのお弟子たちが集まったとき、議論がこじれて、なかなか決着がつきませんでした。

それは、私、親鸞が、「法然さまがいただいております信心と、私がいただいております信心と、そのあいだには、少しのちがいありません」というと、そこにおられたお弟子たちは、口をそろえて「善信房（親鸞さま）の信心と、先生のご信心が全く同じだ、などというのは、とんでもない思い上がりだ。あなたは一体何という失礼なことをいうのか」と反論するのでした。

そこで私は、「いやどうしても同じでなければなりません。なぜかといえば、先生の鋭いものの見方とか、すぐれた学識と、私の力とが同じだ、などというのなら、まことにおそれ

おおいことです。

だが、ひとたび、浄土往生の信心ということになれば、広大な阿弥陀の親心が、私を導かれることですから、その心を、私の能力で獲得した心だ、などとはいえないはず。だから、先生の信心も阿弥陀の親心とのめぐりあい、私の信心も阿弥陀の親心とのめぐりあいですから、違はずがない、と申したのです」と述べますと、法然さまはたちどころに「信心が違うというのは、自分の努力で何かを信じるという自力の信についてなら言えることでしょう。つまり、物事を見分ける能力が違うのですから、信じるということにも深い浅いの違いがでてくるのです。

しかし、他力の信心ということになると善人であろうと、悪人であろうと、みんな阿弥陀如来の親心から恵まれたものですから、私の信心も、善信房の信心も同じでなければなりません。信心はみな一つなのです。私が賢いから信じられるのではないのです。だから人によって、信心に深い、浅いの差があると思っておられる人がいたら、その人は、私が参ろうとしている浄土には、決して生まれることはできないでしょう。このことは、とても大事なことです。よくよく心にきざみつけておきなさい」と、おおせになりました。そのとき、そこに集まっていた人々は、舌を巻き、口を固くつぐんで、おそれ入るばかりでした。

如来よりたまわりたる信心

暁あけがらす鳥はや敏先達の『歎異抄講話』に「信心一異諍論」についての記述があります。以下は、その一部です。

「同じ正宗の銘酒でも、金の銚子の中にあるのはうまさうに思はれ、かけ徳利の中にあるのはまづさうに思はるゝのが人情である。これは人情ではあるが、実際飲み味はうてみれば、金の銚子の中にあろうが、かけ徳利の中にあろうが正宗は正宗で、銘酒は銘酒である。他力廻向の信仰は一つであっても、それを受持する人の間に、善悪賢愚の差別があるから、従つて善人や賢人の持つてをる信心はよいやうに思ひ、悪人や愚人の持つてをる信心はわるいやうに思ふのが人情である。然しその実は唯一本願の信心であつてみれば、その入れる器によつて異なりがあらう筈がない。勢観房・念佛房の惑ひはこの人情の夢である。親鸞聖人や法然聖人の仰せは事実の教へである。この事に就いては、今日の私共でも、ともすると迷ふのであるから、とくと味はゝして頂かねばならぬ。

清沢（満之）先生のやうな方の行動を見て、私のやうな者の行動を比べてみると、同じ信心を持つてをる者と

は思はれぬほどにかけ離れてをるのである。先生ばかりでもない、私の友人間で見ても、私のやうなつまらない奴と他の畏敬すべき友人と一つ信心の兄弟であると云つては、何だか、先生にすまぬやうな、友人に気の毒なやうな感に打たれるのである。然しこれは、行動によつて信仰を律しようとしてをるからである。信仰は道徳ではない、又学問でもない。信仰は自分では何等の能力のないものをこの儘まま助けて頂くといいふ自覚である。語を換ふれば、各自の持前の青黄赤白黒の色彩をその儘にして、救うて下さる大慈悲の御心が私共の胸に徹底したありのまゝである。で、信心はそのまゝ如来の慈悲であると云はれ、如来とも味はゝるのである。故に、先生と私といくら徳行が違はうが、学問が異ならうが、この儘で助けて頂いてをる佛の御恩といふ事については、何等の差異がないのである。先生も自力では地獄に行く人である。私も地獄行きである。先生も如来に助けられて浄土に行った人である、私も亦如来に助けられてをるのである。法然聖人も親鸞聖人も地獄に行く人である。私もそうである。この地獄行の私が如来に助けられて極楽に行くのである、法然聖人も親鸞聖人もやはりさうである。」

〔暁鳥敏全集六卷〕より〕

第八図



報恩講には、本堂の向かって左側余間に『御絵伝』を掛けます。これは親鸞聖人のご生涯を描いた四幅二十図の絵巻物です。『御伝鈔』に対応して描かれ、上の第八図は「信心一異諍論」と呼ばれる場面です。

以下の場面の説明は、『親鸞聖人伝絵―御伝鈔に学ぶ―』（東本願寺発行）によりました。

「前段の信行兩座の翌年、建永元年（一一〇六）八月十六日、宗祖三十四歳の時、吉水の禅房で、自分の信心も弥陀如来から賜った他力ゆえ、師の信心と同じであると申されたことから、聖信房・勢観房・念仏房といった高弟たちと、思わざる議論をなされたことがあり、これはその折の一場面である。師上人の知恵才覚や学問にも等しいと言ふなら、それこそ分不相応であろうが、往生の信心においては、全く一味であると宗祖は主張なされた。すると聖信房以下の人々は、上人と同じとはもつてのほかと咎め、他力の救済は仏力によるが、他力を信ずるのはこちら側で信力は各別、知恵の浅深によって異なると反論なさつ

たのである。いわゆる信心一異の問題である。そこでこれに対し師上人は、「信心がかわるのは自力の信だからで、他力の信心は如来から賜るのであるから、源空の信心も善信房（親鸞）の信心も同じで、信心がお互いに違っているようでは、私が参る浄土へはとても参りなさるまい」と仰せられて、きびしく誠められたので、さしも激しい諍論もようやく決着がついたのであった。」

『御絵伝』や『御伝鈔』は、



覚如上人が親鸞聖人の業績を顕彰する意図で制作されていますので、ことさら親鸞聖人だけが法然上人と同一の信心をいただいていたように描かれています。しかし、親鸞聖人を咎めた三人の高弟も「他力の信心」を学問的には知っていたに違いありません。ところが法然上人と弟子である自分たちが、同じ信心であるはずがないとの先入観にとられ、その立場で親鸞聖人を非難したのです。

だから法然上人からあらためて「他力の信心」を聞かされると、面々は舌を巻き口を固くつぐんで、そこに立っていなかったことに、恐れ入るばかりだったのでしょうか。

このことは、他人事ではありませんね。

日常生活を止めてお参りし、「他力の信心」に立ち直す。報恩講は、まさにその集いです。

日中法要後の法話を引き受けてくださった百々海真先生は、一九六五（昭和四十）年生まれです。私よりだいぶお若いですが、私の前を歩んでいる方です。ご法話が楽しみです。